Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-11-10

進歩と退歩の時間意識 : 19 世紀西洋思想における社会変動観とその変容

吉田, 耕平

(Citation)
社会の時間 : 新たな「時間の社会学」の構築へ向けて:97-111

(Issue Date)
2022-06-30

(Resource Type)
research report

(Version)
Accepted Manuscript

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90009417

第 8 章　進歩と退歩の時間意識
19 世紀西洋思想における社会変動観とその変容

吉田耕平

第 1 節　近代の時間と社会変動観？

時間の社会学は様々な時間の概念を取り上げてきた。たとえば、時間は「抽象的かつ非人格的な」認識のカテゴリーである（デュルケーム／本書第 2 章）、社会システムの時間は、その作動と結びつく「以前／以後の統一体」である（ルーマン／本書第 3 章）等々。――これらは本書の前半で見てきた通りである。

本章では、それらの議論の出発点となった近代の時間意識に立ち戻ろう。第 1 章（鳥越論文）で指摘されたように、時間の社会学は、「量的なクロックタイム」の偶有性に注意を払ってきた。これは時計のほか、年表やカレンダーに表れる時間意識である。この章では、このような時間の意識が、どのような社会の見方をもたらしたのかを考えていく[1)]。

鳥越によれば、量的なクロックタイムは「近代的時間」の一種である。「近代的時間」の時間意識は「計算可能性」と「不可逆性」、そして「直線性」という特徴を持つ［鳥越 2015: 88-89］。「直線性」とは、真っすぐに進む線として表象されることを指す[2)]。この真っすぐな時間という意識は、社会の変動の捉え方にどう影響してきただろうか？

時間と社会変動の関係を論じる際、注意すべき点がある。社会学者のアンソニー・ギデンズが指摘するように、しばしば「時間は社会変動と同一視されてきた」。しかし、時間と社会変動を同一視するのは「根本的に誤り」である［Giddens 1976: 198, 201=1998: 219，223、訳文修正、強調付加］。だとすれば、「真っすぐ」な時間意識があるからといってそれと同じように「真っすぐ」な社会変動が思い描かれるとは限らない[3)]。

事実、近代的な時間意識のもとでも「真っすぐ」以外の社会変動観は広く見られた。その典型と目されるのは、「進歩」と「退歩」の観念を組み合わせて社会変動を描き出そうとした思想群である。それらは 19 世紀をはさんだ前後の時期、西洋諸国の思想家の間に様々な形で現れた。本稿では、これらのテキストを通して社会変動観の形成・変容過程を跡付けていく。これを通じ、時間意識と社会変動観の関係を考察するのがその目的である。

第 2 節　歴史性による媒介説の検討

（1）時間を社会変動に結び付けるもの

これまで、時間意識と社会変動観の関係については様々な指摘がなされてきた。その中でとくに目を引くのは、ギデンズとバーバラ・アダムの「歴史性」に関する議論である。

ギデンズは、近代社会に特徴的なのは「線形的な linear 時間意識」だと説明している。これは、時間が線のように、したがっておおむね真っすぐに進むことを表す言葉だ。ギデンズは、この時間意識によって「社会生活の特徴である歴史性 historicity」が基礎づけられたと

する［Giddens 1978: 201=1998: 222、訳文変更、強調付加］。

一般に「歴史性」とは、社会が歴史の中で作られていることを指す。だが社会をそのように捉える見方は決して普遍的なものではない。ギデンズは、それを近代の時間意識によって生み出された特殊な意識であると捉え、次のように説明した。

> 歴史性――それは「進歩に向かう運動 progressive movement」の意識である。これは一定の社会における社会生活の特徴である。とくに封建制以降の西洋社会の場合、この意識は、能動的に組織され、社会の変動 social change を促している。［Giddens 1978: 199-200=1998: 221、訳文変更、強調付加］

この一文が示しているのは、近代西洋には〈社会は進歩に向かって運動している〉という意識があり、その意識によって〈社会は歴史の中で作られている〉と見ることが可能となっていること。そして、それによって社会の変動が促されるということだ。

一方、アダムは、社会変動の研究の条件について考察している。それによると、社会変動の研究においては歴史性を読み取ることが重要である。その際、「現在」の中には「過去が充満し」、同時に「未来が胚胎する」と把握することが必要である［Adam 1990: 100-101=1997: 165、訳文修正］。アダムは、それが可能となるための条件にも言及する。

> そのように〔過去、現在、未来を〕理解するには、進歩 progress（または衰退 decline）の観念が不可欠である。そして〔ある状態から他の状態へと〕段階を経ていく継起 stages of succession〔の観念〕もまた、しばしば重要な役割を果たす。［Adam 1990: 101=1997: 165、訳文修正、強調付加］

この一文に示されているのは、進歩だけでなく衰退の観念が必要であること、それによって「段階を経ていく継起」を想定することが重要であること。そしてこれらのことが、社会の過程の理解には欠かせないということだった。

このように両名の議論によると、時間と社会変動は直接に結び付くのでない。それらは「歴史性」によって媒介されていると見られている。このような把握の仕方は「媒介説」とでも呼ぶことができるものだ。

それでは、引用部分に表れていた「進歩」などの概念は、「歴史性」の形成に対してどのように寄与するのだろうか。この点は、時間と社会変動の媒介の仕方を考えるうえで避けて通れない部分だと思われる。

（2）進歩と退歩の観念史から考える

ところが、ギデンズとアダムは「歴史性」の形成経緯について十分に説明していない。とくにアダムは「進歩」の観念等を「不可欠である」としながら、それらはどういった観念な

のか、なぜ不可欠であるのか、といった点に踏み込んでいないのである。

そこで以下では「観念史 history of ideas」の研究を参照し、進歩と退歩の観念について詳しく見ていきたい[4)]。さしあたり〈進歩〉とは、人類は高みへと上昇していくのだとする観念を表すものとしよう。これは知性や道徳、社会や文化といったものの向上や前進を広く含む観念である。その対義語は〈退歩〉である。これは、人類は低いところへと下降していくとする観念である。退化、衰退、堕落といった語を用いる場合もあるだろう。

これらの観念は、古典古代のギリシャとローマから中世の神学の思想までにおいて、思想を形成する重要な要素だった。近代の〈進歩〉や〈退歩〉も、これらの観念をもとにして形成されたと言われる[5)]。以下ではそうした研究蓄積を踏まえながら、近代の〈進歩〉と〈退歩〉が社会変動観の形成と変容に対して与えた影響を考えていく。

議論の出発点として、次の二点を確認しておきたい。すなわち、[a]〈進歩〉および〈退歩〉はどのようなものだったのか、[b] それらはどのような関係にあったのか――という点である。これらについて先行研究では次のように指摘されている。

まず、両観念は互いに反対の方向を向いている。しかし「一つの方向に向かう」（moving toward one direction）変化を表している点は共通である［van Doren 1967］。このことは次のように言い換えられよう。

[a]　進歩と退歩の観念はいずれも一方向的な変化を表している

「一方向的」[6)]といっても、その途上では停滞もあれば一時的な逆行もあるだろう。しかし重要なのは長い目で見て、全体として単一の経路を進むことだ。〈進歩〉の場合は物事が良くなる変化を表し、〈退歩〉は物事が悪くなる変化を表すものと考えられる。

次に、〈進歩〉と〈退歩〉はともに人類全体の「成長 growth」の一部として語られてきた。そのため、いつもこれらの一方だけが用いられるわけではない［Nisbet 1969; Bowler 1989］。そこで本稿では、両者を組み合わせて用いた言説に注目する。

[b]　社会変動はしばしば〈進歩〉と〈退歩〉の組み合わせによって描かれる

ここでいう「組み合わせ」の方法は様々である。その方法によって、〈進歩〉や〈退歩〉が並行して生じる社会変動や、交互に生じる社会変動が描かれるだろう。以下ではこうした点に注目することで、社会変動の描き方にはいくつかの基本パターンがあったことを確認していく。

具体的な作業として、第三節では 19 世紀までの思想を跡付ける。その後、第四節では 19 世紀以降の思想を概観する。いずれもイギリスとフランス、ドイツ語圏の著名なテキストを取り上げる。これらを通じて、近代の時間意識および〈進歩〉と〈退歩〉が社会変動の捉え方にどう影響していったのか、解きほぐしていきたい。

第 3 節　18～19 世紀　〈進歩〉〈退歩〉の社会変動観

（1）啓蒙思想における進歩 vs 退歩

この節では、18 世紀から 19 世紀にかけて見られた思想を概観したい。〈進歩〉はいくぶんとなく、〈退歩〉を乗り越えるために用いられてきたと言われる［Lash 1991; Koselleck 1992］。そうした過程を具体的に確認していこう。

近代の〈進歩〉と〈退歩〉は、もともと「古代派」対「近代派」の論争から生じたとされる。一方の「古代派」は、古典古代のギリシャとローマを理想視する人たちだった。他方、これに対してデカルトやニュートンの学問観を重視したのが「近代派」だった。両派は懸命に学問や芸術は前進したのか、それとも後退したのかを論じたという。この論争では時代の相違が重要だった [7]。この中から生み出されたのが、〈退歩〉対〈進歩〉という一対の観念だった。

この一対の観念は、次第に学問や芸術以外にも適用されていく。際限のない社会の進歩という観念は、**A. ド・サンピエール**（Abbé de San-Pierre、1658-1743）によって作られたと言われる［Bury 1920: 128=1953: 150］。これ以来、過去の歴史を根拠として未来の社会を予想することが評論の仕事となるだろう。

もっと入り組んだ社会変動の道筋は、啓蒙思想の内在的な批判者だった **J. J. ルソー**（Jean-Jacques Rousseau、1712-1778）によって描き出された。その議論は〈進歩〉と〈退歩〉を効果的に組み合わせるものだった。ルソーは、人間の「自己を完成する能力」（perfectibilité）を指摘しながら、それが逆説的に文明の堕落、「人間のあらゆる不幸の源泉」であると論じた［Rousseau 1755=1972: 53］。

> 未開人の実例は・・・これが真の世界の青年期であること、すべてこれ以上の進歩は、外見上は個人の完成、実際は種族の衰退へ向かっての長足の進行であったことを、支持するように思われる。［Rousseau 1755=1972: 96、強調付加］

ここでは、ある面の〈進歩〉も他の面では〈退歩〉なのだとされている。ルソーは、進歩と退歩が同時に生じることを示しているのである。ただしルソー自身は、このような〈退歩〉の先にある未来をも展望していたと言われる［飯岡 2002］。この点では、進歩と退歩が交互に生じることも示されていたのである。

このように 18 世紀、すでに〈進歩〉と〈退歩〉はそれぞれ単独でなく、ひとつのテキストの中でともに用いられていた。こうした中から、その後、社会変動のあり方を描く基本パターンが現れていくのである。

（2）進歩と退歩を通じた社会展望

19 世紀、〈進歩〉と〈退歩〉は様々な歴史――大地、生命、そしてヒトの歴史――に応用されていった。この中でも引き続き、複数の趨勢の併存や、逆方向の趨勢への転換が語

られることが知られている［Bowler 1989=1995］。

新たな時代の思想に先鞭をつけたのは、最後の啓蒙思想家と呼ばれる **M. ド・コンドルセ**（Marquis de Condorcet、1743–1794）である。コンドルセは『人類精神進歩史』で、人間精神の「完成可能性」（perfectibilité）は際限がない（indéfinie）と力説した。

> 〔私の著作の〕結果は・・・この完成への進歩は、これを停止しようとする権力とは爾来まったく関係なしに・・・限界を有せざることなどを、推理と事実をもって示すであろう。［Condorcet 1793: 3-4=1951: 23、訳文変更、強調付加］

果てしない進歩の可能性を歌い上げたことで有名なテキストである。だがこの中でコンドルセは、何度も〈進歩〉の限界や〈退歩〉の可能性を吟味していた。そうした検討を経て〈際限なき進歩〉の確からしさを指摘する議論だったことには注意が必要である[8)]。

それ以降は、再び複数の傾向を組み合わせた社会変動観が現れる。その一つは〈進歩〉と〈退歩〉の同時進行を描くものだった。その代表例は、初期の社会主義者 **H. ド・サン＝シモン**（Henri de Saint-Simon、1760-1825）である。サン＝シモンは、産業者と非産業者の間に対照的な傾向を見いだし、社会変動の趨勢を説明しようとした。

> 産業者が能力、重要性、実力において大きな進歩をとげた間に、非産業者の階級はあらゆる点で退歩した。しかしそれにもかかわらず、王権はこれら非産業者の階級から公共財産の管理者を選び続けた。［Saint-Simon 1823=2001: 33、訳文修正、強調付加］

これらの趨勢は並行して進むが、ときにぶつかり合い、破綻をきたす。このような論法は、その後も、矛盾の蓄積や危機の生成を語るためにしばしば用いられるだろう。

もう一つは、〈進歩〉と〈退歩〉が交互に進行することを指摘するものである。この点で著名なのは英国の古代史家・教育者 **T. アーノルド**（Thomas Arnold、1795–1842）である。アーノルドは滅びゆく文明について述べながら、その中の崇高な使命について語った。

> もし現存する国が、世界の最後の拠り所であるのなら、世界の運命は、これらの国の手中にあると言えよう。これらの国がその運命を実行しないなら、この世における神の仕事は、なされぬままとなろう。［Arnold 1842: 31、Bowler 1989: 55=1995: 89 に引用訳出、強調付加］

アーノルドはこうした教説を通じて、青年たちが各自の運命を果たすべきだと説いた。新たなリーダーたちは現存の文明を全うし、新たな文明への橋渡しとなるものと期待された。ここには「終わりの後に、始まりが訪れる」という社会変動観が読み取れる。

以上のように〈進歩〉と〈退歩〉は、古い時代と新しい時代という区分の中で生まれた。それらは様々な仕方で組み合わされて、複雑な社会変動を描き出すこととなった。ギデンズやアダムのいう「歴史性」の意識は、このような過程を経て形成されていったと考えられる。

第 4 節　19～20 世紀　〈進歩〉〈退歩〉に抗う社会変動観

（1）空想と嗜好、およびその排除

しかし 19 世紀の物語はこれが全てではない。この時代には、もう一つ重要な展開があった。それは、〈進歩〉と〈退歩〉は社会変動の事実そのものを表わさなくなるという変化だった。これを通じて、上に見てきた例とは別種の考え方が姿を現すのである[9]。

この点で興味深いのが、1863 年にフランスの **J. ヴェルヌ**（Jules G. Verne、1828-1905）が書いた空想小説『20 世紀のパリ』である。これは 97 年後の未来を描く作品だった。この中に現れる巨大都市パリは、工学の技術が発展している。市内のいたるところに「電磁気」街灯が備わっているなど、「さまざまな改良や進歩」が見られる。一方、この都市は文学的な想像力を拒絶し、「疲労や失望や辛さ」を生み出している［Verne [1863]1994=1995: 48, 189］。ここには〈進歩〉による〈退歩〉の顛末――ルソーの未来像の逆転――が描かれている。

こうした文明社会の両義性は、遠い未来にばかり描かれたわけではない。後に退廃（デカダンス）文学の源流となるだろう **C. ボードレール**（Charles Baudelaire、1821-1867）は、若き日の箴言で眼前の「進歩」を次のようにこき下ろしていた。

> 機械の発達がわれわれをひどくアメリカ化し、進歩が我々の精神的方面の全体を極度に萎縮せしめる結果。ユートピストどもの血なまぐさい、冒涜的な、反自然的な妄想でさえも、進歩の実証的・積極的な諸結果とは比較にならない……。［Baudelaire [1851]1887=1974: 43-44、訳文修正、強調付加］

ボードレールはこのような趨勢を形容して「世界の破滅、あるいは世界の進歩（破滅でも進歩でも名称は構わない）」［ibid］と揶揄している。この過程は〈進歩〉であるからこそ〈退歩〉でもあるのだ。この観点に従えば、物事が〈進歩〉であるのか〈退歩〉であるのかは、人々のものの見方を反映したものにすぎないのである。

19 世紀の末、こうした発想は文学の殻を抜け出て、時代の風潮となっていく。今や社会科学の文献にも、現代人の退化や先進文明の衰弱といった言説が現れる。建前上は客観的な社会分析でさえ、社会の行く末は真っ暗であることを論じたのである[10]。

このような時勢を苦々しく思っていた研究者の一人が、オーストリア領ポーランド出身の法学・社会学者 **L. グンプロヴィチ**（Ludwig Gumplowicz、1838-1909）である。グンプロヴィチによれば、社会の構成には進歩も退歩もない。というのも、あるとき力を保有している集団は、いつでも、主導権を奪われる可能性があるからだ。

このような・・・推移は・・・いつでも完成され、〔逆に〕対抗者が現れればいつでも変更されるような過程だと認識されるべきだ。［Gumplowicz 1885=1899: 204、強調引用者］

社会の構成は何度でも移り変わるから、行きつく先が最終的な状態なのかは誰にも知りえない。したがって社会全体の進歩や退歩を述べることは適切でない――これがグンプロヴィチの指摘だった。

これらのテキストはそれぞれに、〈進歩〉や〈退歩〉の新たな使われ方を示唆している。それらは、純粋に現実の社会変動を表すものとは見られなくなった。それらの観念は事実そのものでなく、論者が描きたい現在、語りたい未来を表すものと理解されていくのである。

（2）神話と理想、およびその利用

しかし、〈進歩〉や〈退歩〉が全く社会変動の把握に役立たなくなったわけではない。それらの観念は事実そのものではないにせよ、社会変動に関する理想や信念を表すものとしては有用なのだ、とする指摘が現れるのである。最後にこの点を見ておこう。

そのような考えを打ち出した論者の一人が、フランスの思想家 **G. ソレル**（George Sorel、1847-1922）である。ソレルによれば、「進歩の理論は、ブルジョワジーが征服者階級であった時代には、ひとつの教義として受け入れられていた」［Sorel 1908a=1974: 6］。当時の人々にとってその教義は純粋な理論だったろう。しかし今の時代、それは幻想としか映らない。では、全ての幻想を手放すべきなのか。ソレルは、そうではないという。

幻想や愚考に陥らずに、未来のかような描写（完成された社会状態の予想）をつくりあげるいかなる方法もないのである。［Sorel 1908b=1974: 219、強調引用者］。

そのためブルジョワジーも大衆も、何らかの「幻想や愚考」、そして神話を必要とする。そこでソレル自身は、崩落する社会の〈退歩〉という筋書きを示そうとした。それによって大衆の不満を呼び覚まし、抵抗と蜂起を喚起しようとしたのである。

これとは対照的な議論をしたのがイギリスの歴史哲学者、**R. G. コリングウッド**（Robin G. Collingwood、1889–1943）である。コリングウッドは「人類史には進歩があるのか？」と問い、その答えは自分の「信念」によって決まると説いた。

・・・もし現代人がその勇気を持ち合わせていて、今日進行しているようなことを本当に価値あるものとして承認できるならば、その時、今日の現状に導いたところの歴史の歩みは、その結果によって合理化され、その歩みは初めて、前進であったと決められるであろう。［Collingwood 1929=1985: 35、訳文修正、強調付加］。

つまり、事実だけに基づいて何を進歩とするかは決められない。それは、一人一人が決めることなのだ。ここでは、理想や信念を表明するものとして〈進歩〉の観念が用いられている[11)]。

これらのテキストにおいて〈進歩〉や〈退歩〉は先験的な観念となりつつあったと言えるだろう。それらはもはや事実を表す観念ではなく、価値を表す観念となっているのだ。社会変動の事実を問うための観念としては、役割を終えつつあったのかもしれない。

実際、これ以降は、それまでのように両観念を「組み合わせて」用いる例は見られなくなっていく。それらが社会変動の描き方に関わっていた時代は終わったのかもしれない。だとすれば、その点に着目して社会変動観を跡付けてきた作業も、ここまでとすべきだろう。

ここまで、近代の時間意識ならびに〈進歩〉と〈退歩〉が社会変動の捉え方にどう関わっているかを調べてきた。それを通じて、両観念の「組み合わせ」による社会変動観の基本パターンは確認できただろう。その結果を踏まえて、考察を行うことにしたい。

第 5 節　多様な社会変動観とその変容

（1）〈進歩〉〈退歩〉が支える歴史性

ここではあらためて、ギデンズとアダムが提起していた説に取り組もう。それは、近代の時間意識が「歴史性」を通じて社会変動観に関わっているのではないかという説だった。本稿の結果に基づいて、この考えを敷衍していく。

そのためにまず、 [c]〈進歩〉と〈退歩〉はどのように近代の時間意識と関わっていたかを考えよう。これについては、両観念が生み出された近代初期の言説（第 3 節(1)）を想起するとよいだろう。それらの言説は、古典古代から現代にかけて連綿と続く時間の意識があってこそ成り立つものだったと考えられる。このことから次の点が指摘される。

[c]〈進歩〉と〈退歩〉の成立は、近代的な時間の意識を前提として生じたものであった

この命題は、時間意識と進歩観・退歩観の関わりについて述べたものである。このような視点を持つことで、時間意識と社会変動観を媒介する要素について議論を進めていくことができるだろう。

もう一つ、[d] 〈進歩〉と〈退歩〉はどのように社会変動観と関わるかということも考えよう。一見、これら二つは反対の方向を向いていて、水と油の関係にある観念である。しかし上にみてきたテキストは（第 3 節(2)～第 4 節(1)）、いずれも両方の観念に言及していたのである。この結果からは次の点を指摘できる。

[d]〈進歩〉と〈退歩〉を組み合わせて用いることで、複雑な社会の変動を問うことが可能となった

これは、進歩観・退歩観と社会変動観の関わりについて述べた命題である。このような視点を持つことも、やはり、時間意識と社会変動観を媒介する要素について議論するうえで有益だと考えられる。

それでは、これらの視点をまとめると何が言えるだろうか。ここでは、一歩踏み込んで次のような命題を示しておきたい。

> 進歩と退歩の観念は、近代の時間意識を社会の見方に持ち込み、歴史性に関心を向けさせる働きをしたのではないか。そしてそのような働きこそが、歴史性に根差した社会変動の把握を促したのではないか。

このような命題は、ギデンズとアダムが素描した「媒介説」に具体的な内容を与えるものだ。ここには〈進歩〉と〈退歩〉による歴史性こそが近代の時間意識を社会変動観へと結びつけたのではないか、という仮説が含まれる。もちろん現時点ではその妥当性を十分に吟味できない。だが今後の研究を通じてこの仮説を検証していくことは重要であるはずだ。

(2)「線形的」社会変動観の虚実

しかしそうした検証過程を通じて、ギデンズとアダムの議論に見られる問題点も浮かび上がると思われる。最後にそうした点について述べておきたい。

その一つは、〈進歩〉と〈退歩〉の関係が重視されていなかったことである。ギデンズは退歩の意識に言及しなかったし、「進歩（または衰退）の観念」と書いたアダムは、退歩の観念をオマケ程度にしか見ていなかったと思われる。そのような把握の方法は、〈進歩〉〈退歩〉の両方が揃ってこそ歴史性の意識が促されるという点を捉え逃してしまうだろう。

もう一つの問題は、この歴史性によって生まれた社会変動観の多様性が看過されていることだ。それは、アダムが社会変動研究の特徴を整理したくだりに見て取れる。

> 媒介変数上の点と点の間の変動の研究は、変動の過程の研究とは区別すべきである。しかしどちらの研究も、複数の段階、線形的な linear 進展 progression を想定しているのである。［Adam 1990: 101=1997: 165、訳文修正、強調付加］

これによれば、社会変動の研究はいずれも社会の「線形的」進展を想定していることになってしまう。しかし、「線形」つまり一本の「真っすぐ」な線の形で社会が変動するなどという言明は比喩以上のものとは思えない。仮に表現を緩めて「線形的」を「一方向的」と置き換えると、今度は、事実に反する言明となるだろう。はたして前節までに見てきたテキスト群――複数の道筋や逆方向への反転を描く社会変動観――は幻だったのだろうか？[12)]

このように、既存の所説には重大な事実誤認がいくつかあるように見受けられる。本章を通じて検討してきた媒介説をさらに展開していくためには、そうした不備を克服していく

必要があるだろう。

ただし、こういったからといって「一方向的」社会変動観があったことをまったく否定すべきわけではない。本章では取り上げなかったが、〈進歩〉だけを語った社会変動観などは無数にあるからである。また進歩観や退歩観が神話や信念と見られるようになった後は（第4節(2)）、社会の変動を、進歩も退歩もなく方向も持たないような過程と捉える見方も現れるだろう。これを「一方向的」な社会変動観の出現と見なすことは可能かもしれない[13)]。

このようなことから、今後は本稿の射程よりもさらに幅広く〈進歩〉と〈退歩〉の使われ方を探り出すことが重要となるだろう。それによって、時間意識と社会変動観の関係に関する議論を深めていくことが求められる。

第6節　社会変動論への示唆

本章では 19 世紀の西洋思想を主たる対象として、進歩と退歩の観念史を考察してきた。その出発点においては、[a]〈進歩〉と〈退歩〉は個々に見れば反対の方向に向かう変化を表すが、[b] 社会の変動はこれらを組み合わせて描かれることがある、という点を確認した。

テキストの検討からは、[c]〈進歩〉と〈退歩〉はいずれも近代の時間意識を前提として生じた一方で、[d] これらの観念は社会の変動に関心を向けさせる要因となったのではないかという可能性が指摘された。

これに基づけば、ギデンズとアダムの示唆の通り、近代の時間意識は〈進歩〉と〈退歩〉を通じて歴史性に結び付いていたことが理解される。一方、ギデンズとアダムは近代の思想家が広く〈一方向的〉以外の社会変動を描いていた事実を見逃していたことも浮かび上がる。

今後の課題は、第一に、〈一方向的〉社会変動観およびそれ以外の社会変動観をともに視野に入れた研究を行うことである。これを通じて、近代的時間意識と社会変動観の関係を包括的に把握することが求められる。

その際は、神話や信念としての進歩観や退歩観が現れて以降の展開について検討することも必要となろう。両観念が社会変動の描き方に関わらないとき、その裏側には進歩も進歩もなく、方向も持たないような社会変動観が現れると予想されるが、どうだろうか。

このことから第二に、20 世紀以降についても〈進歩〉と〈退歩〉、社会変動観の関係を問うことが求められよう。社会思想史上、進歩と退歩は今なお一定の役割を果たしている。と同時に、方向なく、ただただ変化を続ける社会観もまた存在しているのである[14)]。

見方によっては、そうした変化の捉え方を「真っすぐ」な社会変動観と捉えることも可能かもしれない。これは「真っすぐ」な時間意識を下支えするものとも思われる。だとすればギデンズやアダムの議論は、むしろ 20 世紀的状況に合致していると見るべきだろうか。

いずれにせよこれらの考察は「時間と社会変動を同一視するのは基礎的な誤り」［Giddens 1976: 201=1998: 223、訳文修正］という警鐘に従うからこそ可能となる。こうした注意を払いながら、私たちが生きる社会の構成を探っていくことが時間の社会学の役割だろう。

本章では、現代の時間意識や歴史観を取り上げられなかった。続く第 9 章（鈴木論文）と

第 10 章（徳宮論文）では、それらの点についても議論されるだろう。

注

1) そのため本章のアプローチは、「第 2 部　社会の時間概念　生成・変化・回帰の時間」の各章とは異なっている。第 2 部の各章では、近代的な時間の意識を乗り越え、時間の生成の場面を明らかにした理論研究が取り上げられた。それに対して本章で取り上げるのは、そうした理論家たちの議論に先行した 19 世紀の思想家たちである。これを通じて、何が後世において批判されるのか、そして何が現在にまで引き継がれるのかを考えるのが狙いである。
2) この点に示唆を与えた**真木悠介**は、真っすぐな線として「直線」の語を用いている。ところがこれに続いて、真木は「無限に伸びてゆく均質性としてのニュートンの絶対時間」を「直線的」としつつ、これと「『始めと終わり』（アルケーとテロス）によって区切られた」「線分的」時間を区別してもいる［真木 1981: 151、153］――真木は最初の「直線」よりも狭い語義で「直線(的)」の語を使っていると言えるだろう。これに対して鳥越［2015］は、あくまでも前者の意味で「線」という字を使っているため、本章でもこれにならい、これと同じ意味を持つ言葉として「線形 linear」「真っすぐ straight」を使うことにする。
3) しばしば、近代西欧では社会の変動も同じような姿で捉えられてきたと言われる。たとえば歴史学者の**三宅正樹**は、真っすぐな時間の意識と、真っすぐに進む社会の変動（あるいは歴史の発展）としての社会の進歩を断りなく結びつけて論じている［三宅 2005: 183］。この章で検討したいのは、時間意識と社会変動観の間には、もっと入り組んだ媒介の仕方があったのではないかということである。
4) 観念史の研究とは任意の「観念 idea」を対象とする思想史の研究方法である。「観念の歴史とは・・・哲学の歴史を扱う際に・・・厳重な体系の中に切り込んでいき・・・体系を構成要素、すなわち単位観念とも呼べるものに分割する」ものとされる［Lovejoy　1936＝1975:12］。
5) 「退歩の観念 idea of regress」は近代以前から見られるというのが通説である。一方、「進歩の観念 idea of progress」については、古典古代から保持されてきたとする説［Nisbet 1980］と、17 世以降に現れたとする説［Bury 1920］に分かれる。しかし、いずれの学説も、近代においては進歩の観念が――とりわけ〈際限なき進歩〉の観念が――重要な役割を果たしたことを認めている［吉田 2021］。一方、それ以降は退歩の観念にも同等の注目が求められてきた［Pick 1989］。以下の狙いは、とくに〈進歩〉と〈退歩〉の異同および関係に焦点を当てることである。このため、各観念の下位類型――たとえば「人間の社会」は「より良く変えられる」のか、あるいは「より良いものになりつつある」のか［Weinberger 2005: 1912］――については論究できないことを断っておく。
6) 「一方向的 one-directional」の語は、社会変動の一定の特徴を表す際に用いたい。一方、時間の一定の特徴としては「線形 linear」「真っすぐ straight」という語を用いる。これら

「線形」「真っすぐ」の語は、原則、社会変動の特徴としては使わないことにしよう。これらは一本の真っすぐな線の形を含意するため、限定が強すぎるからだ。ただし、アダムはこれらの語を社会変動の特徴としても用いたため、後ほど、それを批判的に取り上げたい（第 5 節）。なお関連する語として、ギデンズは一定の社会変動に「不可逆的 irreversible」の特徴を認めているが、これは本章の議論に関わりの薄い概念である。

7) 実際の論点は多岐にわたっていた［Aldridge 1968］。だが重要なのは、それらを貫く時間意識である。それは論争の当事者にとって、古い時代と新しい時代の区分が――国の違いや環境の違いを押しのけるほどに――大きな意味を持っていた点に表れる。地中海を訪ねたこともないロンドン人やパリ人が、西ヨーロッパを知らない 2000 年前のギリシャ人やローマ人と競い合ったのだから、これはじつに奇妙な論争だった。

8) 言い換えれば、ルソーやコンドルセのテキストは〈進歩〉と〈退歩〉のどちらかは事実であると想定し、そのうえでどちらが事実なのかを問うていた。この意味では、〈進歩〉と〈退歩〉の両方とも社会変動の事実認識を競う観念だったと言える。

9) 先行研究で示唆されているのは、19～20 世紀を通じて〈進歩〉はこの世の夢や理想を表し、〈退歩〉はこの世の悪夢や地獄を表すものとなっていくこと。またこれらの観念は、同じ事柄に対する別様の視点であると理解されていくことである［Kumar 1987: 110］。それによって、〈進歩〉や〈退歩〉の語りは恣意的だと受け止められていく。だが、このことが社会変動観に与えた影響は十分に研究されていないと思われる。

10) 一例として、ハンガリー出身の評論家 **M. ノルダウ**（Max S. Nordau、1849–1923）はパリの「世紀末」気質から「おなじみの二疾病、すなわち変質とヒステリーの合流」を指摘した［Nordau 1892=2002: 146］。また、心理学者 **G. ル・ボン**（Gustav Le Bon、1841-1931）は、「最下層の民衆」が「社会のクズ」となって騒擾を生み出していると難じた［Le Bon 1912、 長谷川 2016: 63 に訳出引用］。

11) 〈退歩〉の神話を掲げようとしたソレルと、〈進歩〉の理想の必要を訴えたコリングウッドでは、描いた変化の方向が正反対である。だがこの両者の議論を通じて、進歩と退歩は神話や理想として再度、社会変動の理解のために必要とされたのである。なお **K. マンハイム**（Karl Mannheim、1893-1947）は、こうした両観念の役割に踏み込まなかったものの、進歩の観念がイデオロギーの一種だと見定めていた［Mannheim 1929=1968］。

12) 進歩・退歩の観念史研究においては、〈進歩〉の思想、とくに〈際限なき進歩〉の思想だけが不当に強調されてきた、という批判は繰り返し提示されており、それにかえて退歩および進歩と退歩の循環説が強調されてきた［Ginsberg 1968=1987/1990; Nisbet 1969］。〈進歩〉に力点を置くギデンズやアダムの記述は、既に批判され尽くした俗説を繰り返してしまったものと理解される。時間の社会学の理論家たちが、①進歩・退歩の観念史研究をまったく参照しておらず、②社会変動論の研究を丁寧に参照しておらず、そして、③これら二つの問題を重ねてしまっている、という三つの問題が読み取れる。

13) 実際、〈進歩〉と〈退歩〉の「組み合わせ」を行わず〈進歩〉のみ、あるいは〈退歩〉の

みを語る思想や、単一の方向へ「際限なく」続く進展を描く例などは無数に存在した［Bury 1920; Pick 1991; 吉田 2021］。また第 4 節(2)で示した事例の先には、良くも悪くもならず、指標の値が増大していくだけの（場合によっては「真っすぐ」な）社会変動の描き方も表れてくるとされる［van Doren 1967: 7-8］。ギデンズやアダムはそれらの社会変動観を一緒くたにして「線形的な」変動と捉えていたかもしれない。

14) 19～20 世紀における変動の描き方には様々なパラダイムがあるとして、それらを 10 通りのパターンに区分した議論は有名である［Moore 1963＝1968: 46］。一方、20 世紀から 21 世紀の現在に至るまで、〈進歩〉や〈退歩〉は重要な観念であり続けていることも繰り返し指摘されている［Nisbet 1980; Bowler 2017; Wagner 2017; Urry 2017］。

文献

長谷川一年［2016］「世紀末における群衆論の系譜――シゲーレ、フルニアル、ル・ボン」高野清弘・土佐和生・西山隆行 編『知的公共圏の復権の試み』行路社，39-67.

飯岡秀夫［2002］『ルソーの「文明論」――「再生」の行方』高文堂出版社.

川上源太郎［1974］「ソレルの人と思想」川上源太郎編『進歩の幻想』ダイヤモンド社，273-312.

真木悠介［1981］『時間の比較社会学』岩波書店.

三宅正樹［2005］『文明と時間』東海大学出版会.

鳥越信吾［2015］「時間の社会学の展開」『人間と社会の探究――慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学』79: 83-97.

吉田耕平［2020］「退歩の観念を葬ったのは誰か――Ｐ・ボウラーとＭ・ホーキンズの進化思想史再読」神戸大学社会学研究会『社会学雑誌』37: 127-140.

――――［2021］「十九世紀西欧思想史と〈際限なき進歩〉への抵抗――Ｊ・Ｂ・ビュァリとＲ・ニスベットの観念史研究を再読する」日本社会学史学会『社会学史研究』43: 81-104.

Adam, B. [1990] *Time and Social Theory*, Cambridge, UK: Polity. （伊藤誓・磯山甚一訳『時間と社会理論』法政大学出版局，1997 年.）

Aldridge, A. O. [1968] “Ancients and Moderns in the Eighteenth Century,” Philip Wiener ed., *Dictionary of The History of Ideas: Studies of Selected Pivotal Ideas*, New York: Charles Scribner's Sons. （川島昭夫訳「新旧論争」『進歩とユートピア』平凡社，1987 年，136-189）（同訳「新旧論争（18 世紀に於ける）」『西洋思想大辞典』平凡社，1990 年，1：564-575.）

Bowler, P. [1989] *The Invention of Progress: The Victorians and the Past*, Basil Blackwell. （岡嵜修『進歩の発明――ヴィクトリア時代の歴史意識』平凡社，1995 年.）

――――［2017］*A History of the Future: Prophets of Progress from H. G. Wells to Isaac Asimov*, Cambridge University Press.

Buckley, J. H. [1966] *The Triumph of Time: A Study of the Victorian Concepts of Time, History, Progress, and Decadence*. Cambridge, MA: The Belknap Press of Harvard University Press.

Bury, J. B. [1920] *The Idea of Progress: An Inquiry into Its Origin and Growth*. MacMillan and Co.（高里良恭訳『人類進歩の史的考察』博文館，1928 年＝同訳『進歩の観念』創元社，1953 年.）

Collingwood, R. G. [(1929)1965] "A Philosophy of Progress," *Essays in the Philosophy of History*, W. Debbins ed., University of Texas Press, Austin. （大野千登世・菊川忠夫訳「進歩の哲学」大野千登世・菊川忠夫編『歴史と進歩』イザラ書房，1985 年.）（峠尚武・篠木芳夫訳「進歩の哲学」『歴史哲学の本質と目的』未来社，1986 年，216-241.）

Condorcet, M. N. C, Marquis de [1793] *Esquisse d'un tableau historique des progrès de l'esprit humain*.（渡辺誠訳『人間精神進歩史　第一部』岩波書店，1951 年.）

Giddens, A. [1976] "Time, Space, and Social Change," in 1979, *Central Problems in Social Theory: Action, Structure, and Contradiction in Social Analysis*, CA: University of California Press.（友枝敏雄訳「時間、空間、社会変動」友枝敏雄・今田高俊・森重雄 訳『社会理論の最前線』，1989 年，215-255.）

Ginsberg, M. [1968] "Progress in the Modern Era," Philip Wiener ed., *Dictionary of The History of Ideas: Studies of Selected Pivotal Ideas*, New York: Charles Scribner's Sons, 609-625. （見市雅俊訳「近代における進歩」『進歩とユートピア』平凡社，1987 年，58-135）（＝同訳「進歩の観念（近代における）」『西洋思想大辞典』平凡社，1990 年，2：609-625）

Gumplowicz, L. [1885] *Grundriss Der Soziologie*. (Frederick W. Moore, trans., *The Outlines of Sociology*, Philadelphia: American Academy of Political and Social Science, 1899.)

Koselleck, R. [1992] *The Practice of Conceptual History: Timing History, Spacing Concepts*, Translated by Todd Samuel Presner and Others, Foreword by Hayden White, Stanford, CA: Stanford University Press.

Kumar, K. [1987] *Utopia and Anti-utopia in Modern Times*, Oxford: Basil Blackwell.

Lash, C. [1991] *The True and Only Heaven: Progress and its Critics*, New York, NY: Norton and company.

Le Bon, G. [1912] *La Révolution française et la psychologie des révolutions*, Flammarion.

Lovejoy, A. O. [1936] *The Great Chain of Being: A Study of the History of an Idea*, Cambridge, MA: Harvard University Press. （内藤健二訳『存在の大いなる連鎖』晶文社，1975 年.）

Mannheim, K. [1929] *Ideologie und Utopie*, Bonn: Friedrich Cohen. （鈴木二郎訳『イデオロギーとユートピア』, 1968 年. ）

Moore, W. [1963] *Social Change*, Englewood Cliffs: Prentice-Hall. （松原洋三訳『社会変動』至誠堂，1968 年.）

Nisbet, R. A. [1969] *Social Change and History: Aspects of the Western Theory of Development*, Oxford University Press. （堅田剛訳『歴史とメタファー』紀伊國屋書店，1987 年.）

Nordau, M. S. [1892] *Die Entartung*. Erster Band, Carl Dunder. (Howard Fertig trans., *Degeneration*, 1895) （森道子訳『変質論』第 1 編「世紀末」，松村昌家編『谷崎潤一郎と世紀末』思文閣出版社，2002 年，129-178.）

Pick, D. [1989] *Faces of Degeneration: A European disorder, c.1848-1918*, Cambridge: Cambridge University Press.

Rousseau, J. J. [1755] *Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes*. （本多喜代治・平岡昇訳『人間不平等起源論』岩波書店，1972 年.）

Saint-Simon, H. [1823] *Catéchisme des industriels*, 1. （森博訳『産業者の教理問答　第一冊』岩波書店，2001 年）

Sorel, G. [1908a] *Les Illusion du Progrès*, Rivière. （川上源太郎訳「進歩の幻想」『進歩の幻想』ダイヤモンド社，1974 年，1-215.）

――― [1908b] *La Décomposition du Marxisme*, Rivière. （川上源太郎訳「マルクス主義の解体」『進歩の幻想』ダイヤモンド社，1974 年，216-272.）

Urry, J., 2016, *What Is the Future?* Cambridge, UK: Polity.

van Doren, C. [1967] *The Idea of Progress*, New York: Praeger.

Verne, J. [1863/1994] *Paris au XXe Siècle*. Hachette Livre, 1994. （榊原晃三訳『二十世紀のパリ』集英社，1995 年.）

Wagner, P. [2016] *Progress: A Reconstruction*, Cambridge, UK: Polity.